

平成21年10月10日

基本財務3表

PL (損益計算書)

BS (貸借対照表)

CS (キャッシュフロー計算書)

PLは、「利益」の計算

PLの「利益」は、売上などの「収益」から「費用」を差し引いて計算する

「収益」－「費用」＝「利益」

PL

収益
費用
利益

収益は、3つに分類される「売上高」と「営業外収入」と「特別利益」

費用は、5つに分類される「売上原価」「販売費及び一般管理費」「営業外費用」「特別費用」「法人税等」

利益も、5つに分類される①売上総利益（粗利）

②営業利益

③経常利益

④税引前当期純利益

⑤当期純利益

BSは、右側と左側に分かれ

右側は、企業が今までに「どうやってお金を集めてきたか」が

左側は、「その集めてきたお金が何に投資されているか」が表わされている。

BSはそもそも組織や個人の正味財産を計算する表である。

BS（会社のBS）

資産の部	負債の部
流動資産 固定資産	流動負債 固定負債
	純資産の部
	資本金 利益剰余金

会社がお金を集めていく方法は、他人から借りる方法と資本家から資本金として入れてもらう方法、そして会社自身が自分で稼ぎだす方法がある。

この会社が稼ぎ出したお金が純資産の部に利益剰余金として貯まっていく。

CSは、収支計算書、現金の出入りを表わす。

しかし、一般の収支計算書は、「収入」「支出」「残高」の3つに分かれているが、

CSは、「営業活動によるキャッシュフロー」

「投資活動によるキャッシュフロー」

「財務活動によるキャッシュフロー」の3つに分かれる。

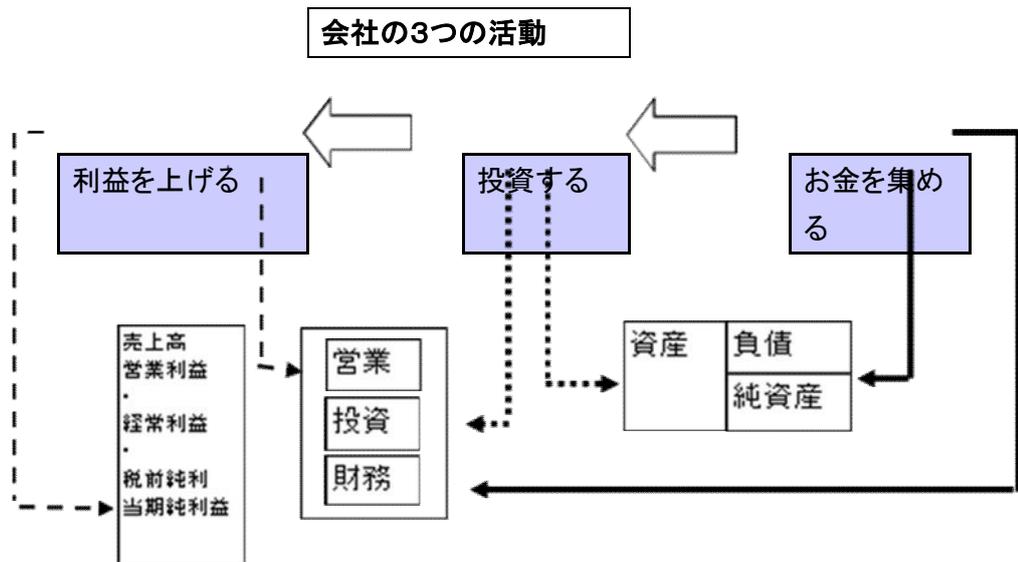
CSは、「営業」「投資」「財務」の欄の3つに分かれた「現金の流れの計算書」、収支計算書と理解すること。

財務諸表は企業の3つの活動を顕わしている

PL BS CSに書かれていることは極めて単純である。

企業の基本的な活動である「お金を集める」→「投資する」→「利益を上げる」という3つの活動が書かれているだけ。

全ての企業は、「お金を集める」→「投資する」→「利益を上げる」という3つの活動を行っているのである



その企業が「どうやってお金を集めたのか」というのがBSの右側に表わされていて、その集めてきたお金が「何に投資されているか」というのがBSの左側に表わされている。

そして、PLに「どのように利益をあげているか」ということが表わされている。

図の真ん中にあるCSは「営業によるキャッシュフロー」「投資によるキャッシュフロー」「財務によるキャッシュフロー」に分かれ、「営業」「投資」「財務」の欄に分かれているのは、会社の基本活動が「お金を集める」→「投資をする」→「利益をあげる」という3つの活動を表わすためである。

どうやってお金をあつめてきたかが「財務活動によるキャッシュフロー」
 何に投資したかが「投資活動によるキャッシュフロー」、
 どうやって利益をあげているかが「営業活動によるキャッシュフロー」
 の欄に、それぞれ現金の動きという観点から表わされている。

多くのビジネスパーソンは、「売上」と「利益」に責任をもって仕事をするが、ビジネスで大切なのは、事業全体として「投資」と「リターン」である。

事業全体のプロセスから言えば、どれだけ利益をあげたかということだけでなく、どれだけ投資に対してどれだけ利益をあげたかが重要であり、そのためにどのようにしてお金を集めてきたかということが大切になってくる。

この事業全体のプロセスである「お金を集める」→「投資する」→「利益をあげる」という3つの活動を表わすためにPLとBSとCSがあるのである。

4つの数字だけで事業の効率が見えてくる

この「お金を集める」→「投資する」→「利益をあげる」という3つの活動を事業のプロセスに従って、事業の効率性を分析する。

第一段階の「**資産を取得するための資金を調達する**」フェーズでは、「レバレッジ比率」という分析指標がある。

これは他人資本（負債）と自己資本の比率で、このレバレッジ比率とは、**資産を取得するための「長期資金」を自己資本（資本金）によって調達しているのか他人資本（負債）によって調達しているのかを見るもの。**

第2段階の「**資産を売り上げに変える**」フェーズでの分析指標は総資本回転率（売上高÷総資本）。

BSの右側の合計額を**総資本**、左側の合計額を**総資産**、総資本と総資産の額はイコール（バランス）、

総資本回転率は、**投下した総資本、総資産をどれだけ効率よく使って売上高に変えているかがわかる指標**である。

第3段階の「**売上げを利益に変える**」フェーズの分析指標は**当期純利益を売上高で割った当期純利益率**で、**売上をいかに効率よく利益にかえているかがわかる指標**である。

事業経営全体の効率性を理解する上で最も重要なのが**ROE**であり、

ROEを事業全体のプロセスに従って見ていけば、レバレッジ比率、総資本回転率、当期純利益率の3つに分解される。

ROE、レバレッジ比率、総資本回転率、当期純利益率の4つの指標をみれば経営がどのように行われているかがわかる。

会社が存続するために必要な2つの要素

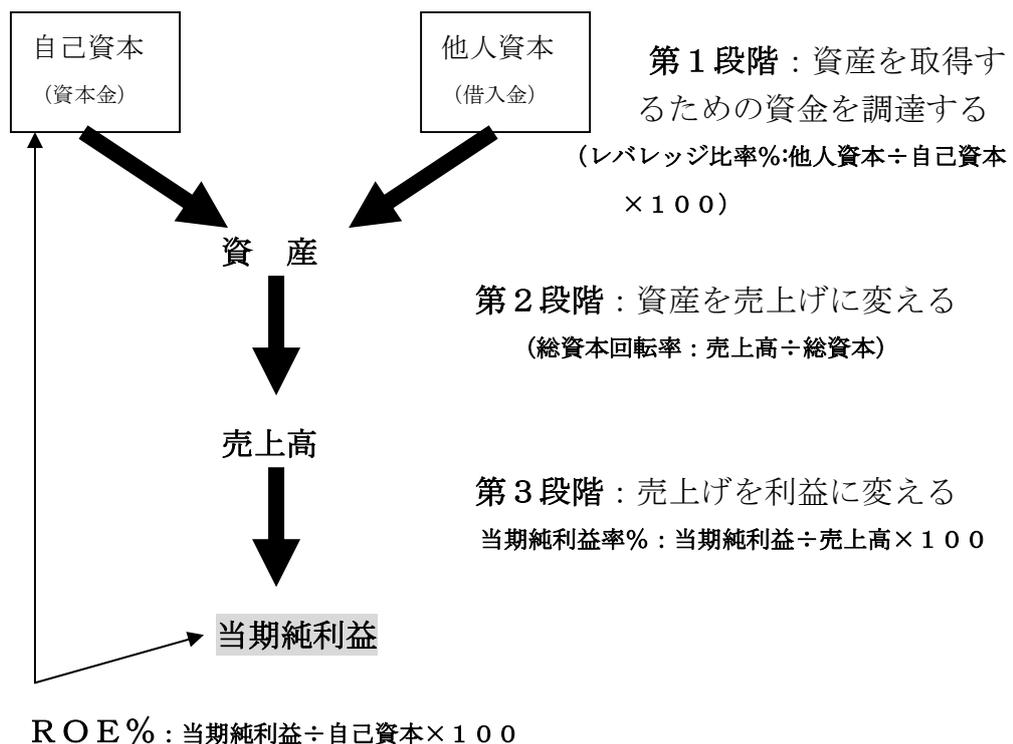
- ・ 利益を生み出すこと
- ・ キャッシュフローを生み出すこと

第1段階、第2段階は、キャッシュのマネジメント、第3段階が利益のマネジメント

キャッシュと利益のマネジメントが効率的になされているかの指標が、ROEです。

会社全体のマネジメントがいかに効率的に行われているか、この点に関しては、ROEを用いて評価することができる。

利益を生み出すマネジメントには3段階がある



キャッシュフローのパターンから会社の様子がみえてくる

CSは、現金の出入りを表わす表ですから、それぞれの金額がプラス（+）になる場合とマイナス（-）になる場合がある。

「営業」「投資」「財務」の3つの欄のプラス、マイナスの組み合わせ、合計8パターンで会社のおおよその状況が読み取れる。

CSをみれば会社の戦略がわかる

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
営業キャッシュフロー	+	+	+	+	-	-	-	-
投資キャッシュフロー	+	+	-	-	+	+	-	-
財務キャッシュフロー	+	-	+	-	+	-	+	-
現金残高								

①+++

営業活動で現金を生み出した上に借入などで現金を増やしている。さらに固定資産や有価証券などを売却している。将来の大きな投資のためにお金を集めているのだろうか。

②++-

営業活動と、固定資産や有価証券などの売却により現金を生み出し、借入れの返済を積極的に行っている。財務体質強化の段階にある会社だろう。

③+-+

営業活動で現金を生み出した上に借入れなどで現金を増やし、積極的に投資活動を行っている。将来の戦略も明確な優良企業のパターン。

④+--

営業活動で生み出した現金を投資活動や借入金の返済に充てている。潤沢な営業CFがある会社であろう。

⑤-++

営業CFのマイナス分を借入れと固定資産や有価証券の売却で賄っている。問題会社の一般的なパターン。

⑥-+-

営業CFのマイナス分と借入れ返済分を固定資産や有価証券の売却で賄っている。過去の蓄積を切り売りして事業を継続している。

⑦---+

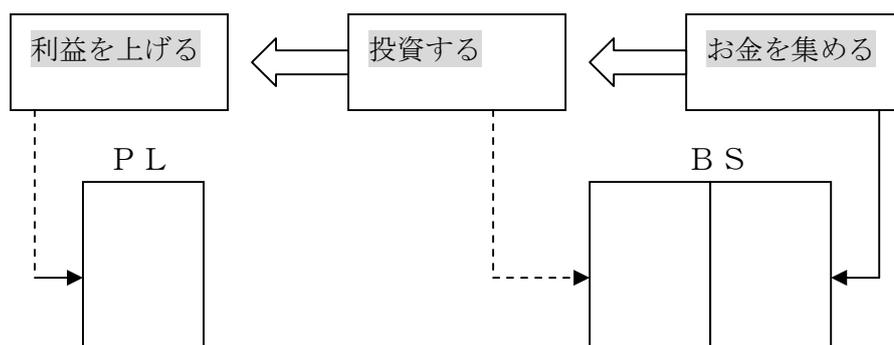
営業活動で現金を生み出せていないが、将来のために設備投資を行っている。営業のマイナス分と設備投資資金をすべて借入や新株発行で賄っている会社。よほど自信がある将来計画があるだろう。

⑧――

営業活動で現金を生み出せていないのに、将来のための設備投資を行い、借入金の返済も行っている。過去に多くの現金の蓄積があった会社なのだろう。

財務分析の手法

財務分析指標に時間をかけるより、財務諸表から会社の全体像をザックリ把握することが重要である。そして、全体像を理解するために財務分析指標を計算した方が合理的な理解につながる。



全体像をイメージすることは、企業の基本活動がいかに行われているかを理解することで、企業の基本活動とは、

- ① どのようにお金を集めて
 - ② それを何に投資して
 - ③ その投資したものをいかに効率よく売上高に変え、
 - ④ その売上高から効率よく利益を上げているか
 - ⑤ 以上の事業全体のプロセスの中で現金がどのように動いているか
- 財務活動の全体像をつかむことが財務分析の基本なのである。

そして、これらの事業全体のプロセスを分析するために活用する主な分析指標が

- ① ROE

- ② レバレッジ比率
- ③ 総資本回転率
- ④ 当期純利益率

分析手順のまとめ

- ① BSの右側を見て、どのようにお金を集めているかをチェックする。特に有利子負債の額がどの程度あるか見ておく。
- ② 利益剰余金の額を見て、その会社が過去に利益を上げていた会社かどうかをチェックする。
- ③ BSの左側を見て、集めてきたお金が何に投資されているかをチェックする。
- ④ その際に、「流動比率」「固定比率」「長期固定適合率」「自己資本比率」などの指標を感覚的にイメージでつかむ。
- ⑤ BSとPLの高さを比べて、投下した資産をいかに効率よく使って売上高に変えているか、つまり総資本回転率をチェックする。
- ⑥ 売上高からいかに効率よく利益を出しているか、またその利益をどのように出しているか（営業利益なのか営業外利益なのか特別利益なのか）といった利益構造をチェックする。
- ⑦ キャッシュフローの8パターンの中の、どれにあたるかをチェックする。
- ⑧ 主要な財務分析指標「ROE」「レバレッジ比率」「総資本回転率」「当期純利益率」の数字をチェックする。
- ⑨ こうやって全体像をチェックしたうえで、気になるところがあれば実際の財務諸表に戻って細かい数字を確認する。

図表作成

そこで、縮尺を同じにしてPLとBSを図にすることが効果的である。

図にしてしまえば、流動比率や固定比率、自己資本比率や総資本回転率、さらには利益率などの財務分析指標が、わざわざ計算しなくとも図の大きさから直感的にイメージできる。

これにCSを加えて、他社比較、期間比較をすれば、会社の状況がさらに客観的に見えてくる。

バランスシートの本当の意味

財務分析をする上で、BSは極めて重要です。事業で大切なのは、「投資」と「リターン」ですから、企業が何に投資し、その投資のためのお金をどうやって調達しているかチェックしておく。

BSは資金の調達方法と活用方法をあらわした表です。つまり、BSの右側は「どうやってお金を集めてきたか」を表し、BSの左側は「その集めてきたお金が何に投資されているか、集めてきたお金がどんな形に変わって会社の中にあるのか」を表している。

また、BSにはもうひとつ、重要な意味合いがある。

BSは、会社や個人の「正味財産」を計算するもので、まず、左側の資産を積み上げ、いま現金はいくらあるか預貯金はいくらあるか、資産にはどれくらいの価値があるか、資産の値段（時価）を記入する。

そして、資産の価値から借金分を差し引いた残りが**正味資産**となる。「資産から負債を差し引いたら**純資産**になる」という考え方、**バランスシートは正味資産を計算するものである**。ある時点での**財産の残高一覧表**でもある。

財務3表一体分析法の3ステップ

- ① 1社の1期分の財務諸表で会社の状況をザックリつかむ
- ② 同業他社との比較し、会社を立体的に把握する
- ③ たくさんの会社を分析し財務分析の感覚を磨いていく

多くの財務諸表を見てセンスを磨くポイント

- ① まず、最初に「利益剰余金」と「有利子負債」をチェック。一般的に優良会社は利益剰余金が積みあがっていて、有利子負債も少ない
- ② 現金商売の業種では、売掛金が少ないため「流動比率100%未満」の会社がたくさんある。財務分析の解説には、「流動比率100%未満は危険」などとされるが、解説を鵜呑みにしてはいけない。
- ③ 有利子負債が多い会社が悪い会社とは限らない。借入金を利用して積極的に事業を拡大している会社の経営指標はよくない数値になりがちである。
- ④ キャッシュフローとBSの関係に注意しよう。疑問に感じたら実際のCSに戻って詳細を確認しよう。
- ⑤ 財務諸表だけから粉飾決算を見抜くことはなかなか難しい。社内に入って実際の伝票や在庫と突合せなければわからないものもある。
- ⑥ 複合商社は「投資家」の視点でビジネスを行っている。日ごろから経営マインドを磨く習慣を身につけよう。
- ⑦ 金融ビジネスを展開していると、総資本回転率が低くなる。大手企業は様々な事業を行っているので、必ず「ゼグメント情報」で事業実態をチェックしよう。

「標準値」を鵜呑みにしない

- ① 流動比率が100%を以上になら良いとは限らない。現金商売の会社では優良企業でも流動比率が100%未満の会社がたくさんある。
- ② 無借金経営が必ずしもよい経営とはいえない。急拡大している段階で、自己資本がたまるまで投資をしないというのでは成長の機会を逸してしまう
- ③ レバレッジ比率が高ければよいというわけではない。事業拡大に積極的な会社はレバレッジ比率が高くなりがちですが、それはリスクが高いことをも意味する。無借金経営をしていればレバレッジ比率は低くなるし、莫大な利益剰余金を積み上げている会社も相対的にレバレッジ比率は低くなる。
- ④ ROE は、投資とリターンの効率を考えれば ROE は重要な財務分析指標になる。

自己資本比率が高いと ROE は低くなる傾向にある。自己株式をたくさん取得すると、利益は変わらなくとも ROE は高くなる。レバレッジを極端に利かせて多くの借金を抱えているリスクの高い会社も、ROE が高くなる傾向にある。ひとつの財務分析指標で判断するのではなく事業活動全体から理解する必要がある。

- ⑤ 規模が大きな会社が良いわけではない。
規模の大きな会社は安定感があるが規模の大きな会社は押しなべて利益率が低いもの。規模の小さい会社がニッチ分野で活躍、善戦し、驚くほどの利益率を上げているケースがある。

わかるのは会社の善し悪しより、経営の意思

- ① 無借金経営型（パナソニック・吉野家）
- ② 本業成長型（マツダ・伊勢丹・シャープ）
- ③ M&A 拡大型（ソフトバンク・ゼンショー）
- ④ 投資家型（三菱商事・三井物産）
- ⑤ 金融事業進出型（トヨタ・日産・ホンダ・ソニー・楽天）
- ⑥ 企業債券途上型（三菱自動車・三洋電機）

このように分類すると財務諸表には、企業の戦略が如実に表れる。財務諸表に表れるのは、会社の過去の状況であり、未来がどうなるかは、財務諸表を見ても一切わからない。将来を見通すことは難しいが、経営者の方意思、方向が垣間見えるかもしれない。